
白銀～俺は此処に居る～

さくらさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀く俺は此処に居る

【Nコード】

N0995X

【作者名】

さくらさく

【あらすじ】

主人公、御剣神薙は転校初日早々に寝坊するという大ボカをやらかす。

急いで着替え学校へ向かって走り出す神薙。

学園が見えてきて、間に合う！そう確信した瞬間、誰かとぶつかってしまい……

まずは読んでみてくださいとしかいえません

執筆速度は鈍足低速

それでもよろしければ（ぺこりっ

【タイトル考え中に付き変わる可能性アリ】

第零章 プロローグ

そこは何もない空間だった
いや、何もないわけではない

ただ、そこには「白」があつた
うん、これもきつとちがう

ここには「銀」があつた
「白銀」だ

そんな空間に囲まれて、俺は何も考えずに漂うだけ
だって、こんな空間夢以外にありえないから
俺は夢だと確信しているから

だから、ただゆったり漂う
漂い何処に着くのかも考えずに

（ああ…光が近づいてくる……）
目を覚ますのだろう

そう思った俺は、そっと夢から覚めるように、意識を浮上させた…
…

第一章 日常の終わり、非日常の始まり

0

(……………は?)

窓から差し込む朝日により目覚めた俺、御剣神薙(みつるぎかな)は目覚まし時計を手に取り硬直してしまった。

目覚まし時計が指し示す時間は「7:43」

登校時刻は「8:00」まで。

「お、俺の馬鹿野郎ー!!!」

転校初日早々寝坊というの大ボカをやらかした俺は、そう叫ばずには居られなかった。

1

ベッドから飛び起き、3分足らずで制服に着替えた俺は寢室を飛び出しリビングを駆け抜

け、急いでキッチンに飛び込み冷蔵庫の中の10秒飯ゼリーを取り出すとそのままの勢い

で玄関に向かい靴を履いて外に飛び出した。

(今の時間が7:47: 学校まで15~20分: 走ればまだ何とかなるか…?)

腕時計を見て頭の中で寝坊した事への文句を垂れつつアパートの階段を駆け下り、全速力

で学校に向かって駆け出した。

(ああ…っもう! 何で転校初日から寝坊なんてするかなあ俺!?)
胸のうちに大絶叫しながら精一杯両足を動かし走り続ける。

通学路をを3分の2ほど消化したあたりで俺は手首にまいている腕

時計を見る。

腕時計が指し示す時間は「7:55」

（もうこれなら歩いていても大丈夫かな？）

つと、腕時計を見ながら考えて走り続けたのがまずかった。

差し掛かった最後のＴ字路。

曲がれば転校先の「私立水明館学園」がすぐそこに見える路地。

俺は、その道を、全力で駆け抜けた。

いや、駆け抜けようとした瞬間……

「きゃっ?!」

「なッ!?!」

ドゴッ!!!?

俺は盛大に、それはもう清々しいほどに、Ｔ字路を歩いていた人と、かなりの勢いで激突した。

ぶつかって吹っ飛びそうになる相手の手を引っ張り、抱き寄せるようにしながら庇う

そうすれば怪我するのは俺だけだと考えた結果だったのだが……
…なんてか、俺はその人を押し倒すような態勢になっていた。

（え……?これ、いったいどういう状況……?）

と、頭の上を何個ものクエスチョンマークが飛び回る俺。

混乱した頭で、相手の様子を確認するために顔を覗き込もうとする

（な、に……?）

その瞬間、目の前が歪んだ

そのまま俺はその人に倒れこむように、意識を失った……

ここは、何処だ…？

俺は何処にいる？

なぜ回りを見回しても白…いや、銀しかないんだ？

俺は通学途中のはずだ…

なのに…

なぜ？

(……汝、我が呼びかけに答えよ……)

……？

どこからか、男性のような…それでいて女性とも取れる声が聞こえてくる

(……我が呼びかけに答えよ……)

呼びかけ？

なんだ、それは？

なぜ俺を呼ぶ、どうして俺を呼ぶ？

(……世界を救え……)

……は？

世界を救え？

なにそれ、俺に言ってるの？

……て、俺に言ってるんですよね…だって、此処俺しかないもの…

(……魂を解き放ち、目覚め、世界を救え……)

言ってる意味がよく分ないし…

魂を解き放て？どうやってと聞きたいね

(…それは私の知る所ではない…)

こいつ……言いたいこと散々言った挙句に知る所ではないとか言うてきたぞこら？

まあ、魂云々は分らんが、目覚めろ……目を覚ませというなら今すぐ覚めてやろう

どうせこれは夢だ、覚めればなにかあるんだろう？

(……………)

沈黙かよ？！

(…世界を救え、今はそれしか言えぬ…)

……はいはい、救ってやるからさっさと俺を起こせてか学校行かせる

(…次第に、目は覚めるだろう…)

ん？そうなの？

つて、目の前が白くなってきた……
何時もの、夢から覚める時のか……

(……………行け神薙、世界を救え……………)

……っ

さて、お前……なんで、俺の……な、まえ……

「それで、その声は聞こえなくなり…俺の意識は覚醒していった…
…そのときは、まさかこんなことになるなんてまったく考えていなかったよ…世界を救うと言ったあのときの俺を張り倒したいね…
？」

第二章 目覚めてみれば

「ん……あ……？」

（俺は何時の間に眠っていたんだ……？）

そう思いながらゆっくりと、目を開ける。

寝起きのせいなのか、まだ意識がはつきりとしなが起き上がり、周りを見回す。

見渡す一面は、緑…草木が生い茂り、花が咲き、日の光が降り注ぐ。

（……は？）

俺は目を擦って再び辺りを見回す。

それでも何も変わった様子はなく、より鮮明に木々や草花を見ることが出来るようになる。

「此処は…どこだ？え？森の中…？」

混乱するなか、それを呟くのがやっとで、それで何かが変わるわけでもなく。

呆けながら眺め続けても一向に景色が変わる事はない。

ふっと、俺は思う。

（俺は、登校途中だったはずだ……確か、そのときに誰かにぶつかって、それから……）

「それからの、変な夢を見て…何か言われて……」

考えて、なぜかその内容が思い出せないことに気づく。

その事実がまた俺を混乱させる。

なぜ俺は夢の内容を思い出せないのか？なぜ俺はこんな場所で寝ているのか？此処は一体何処なのか？

そんな考えばかりが頭の中をグルグル回る。

そのせいで、俺は気づいていなかった：

俺の後ろで気を失っているもう一人の誰かを。

俺がそれに気づいたのは周りを見回し、圧倒されて後ろに下がった時。

それに、手が触れた。

「……え？」

俺は冷や汗を掻く。

触れている手からは柔らかい感触と俺の学校の制服のような手触り。

（俺の学校の制服…？）

俺はその事実気づくと同時、振り返る。

そこに居たのは……

（……？女の子？）

俺の学校の制服を着た女の子が倒れていた。

（なんとなく見覚えがあるのは気のせいだろうか？）

そんな風に思う俺。

だが、こんな場所に一人ではないという事実が俺の思考を冷まし、冷静にしてくれた。

（まずは、この子に起きてもらった方がいいかな？）

そう考えた俺は彼女を起こすことにした。

「おい？大丈夫か？俺の声聞こえてるかー？」

「……………」

「聞こえてないのか？」

「……………」

「聞こえてないらしい……………」

俺は彼女の頬をむにと両手で摘み、引っ張ったり抓ったりこねたりし始める。

摘んでいる俺の手先には、きめ細かい肌の瑞々しい感触が伝わってくる。

そんなことにちよつとドキマギしてしまう俺なのだが…。

「おい？起きてくれないかー？起きないと、もっと弄り倒すぞー？」

「…………ふ、にゅ……………」

「お？」

一瞬少女は反応を返す。

返してくれたが、ただくすぐったかっただけの状態で、そのまま寝返りをうつて顔を隠してしまう。

そんな行動を見た俺は、なんだか知らないが悪戯心が鎌首を擡げた。

（これは…………もっと弄ったらどういう反応を示すのかな…？）

など考える俺。

目的が変わってる？H A H A H A、そんなの関係ナツシングウ！

とは、ならないのが俺である。

まあ…なる時もあるんだろうけど……

頬を摘んで起こすことが出来なくなったので、揺すり起こすことにする。

「ほら、いい加減起きてくれ…てか、よくこんな場所で暢気に寝ていられるな、あんたは…」

揺すりながら彼女の顔を覗き込もうと顔を近づける……その瞬間

「ふえ…？」

「はい？」

ぱちりっ

と、音が聞こえてきそうなほど簡単に彼女の瞳は開かれた。

しかも、身体に触れながら顔を近づけて覗き込む……などという最悪のタイミングで。

まだ少し寝ぼけているのだろうか？じーっと俺のことを見つめてくる。

ぱちぱちっと数度まばたき。周りをキョロキョロ。そしてまた俺に目を向けて、首をかしげて凄く不思議そうに言った。

「あの、此処…何処ですか？」

（はい。それは俺が聞きたいです。）

などと一瞬現実逃避してしまう俺。

遠い眼をしている俺をもっと不思議そうに見つめてくる女の子。

いい加減現実逃避を止めて色々説明した方がいい気がしてきた俺は

「えっと、俺も此処が何処だか分らないんだよ。」

素直にそう告げることにした。
そんな俺に彼女は

「そうなんですかあ……」

（何か納得しちゃったよ?!）

内心焦る俺。

俺がこの子の立場ならきつと納得などしないで余計に喰らいついていくだろうに……

この子は天然系なんだろうか？

「でも、見たところ森の中っぽいですね？」

「……だな、俺も森だと思う。ただ此処は開けていて森にしては明るい所なんだろうけど」

「んー……」

彼女は興味深そうに周りを見回す。

それにつられて俺もまた周りを眺める。

先ほど見たときと変わらず花々が咲き乱れ木々が瑞々しい果実を実らせている。

本当にさっきと変わらない風景……そのはずだった

（……？なんだ、あれ？）

確かに変わらない、その風景に俺は変わったものを見つけてしまった。

それは、ゆらゆらとその場を流れるように進んでゆく青い線のようなもの。

進んでゆく線は森の奥に向かうように進んでゆく。

「……………」

「……？何か見えてるんですか？」

「ん……？ああ、あそこに青い線のようなものが……」

俺はそれを彼女にも分かるように指差した。

俺の指の先を見るように顔を向ける。

すると彼女は小首をかしげて、

「そんなもの、どこにあるんですか……？」

「……………え？ほら、そこに……」

「だから……そんな線みたいなものなんてどこにもないですよ？」

（…………俺だけが、見えてるのか……？）

彼女の言葉を聴き俺はそう考える。

俺はそれをじっと見つめる……。

今ならまだそれを追いかけられる距離だろうか？

（追いかけてみるか……？手がかりも何もないんだし）

俺はそう考えるとその場から立ち上がり一步を踏み出そうと足に力を入れ……ようとしたとき

「あの、どこに行くんですか？」

素で忘れていた俺であつたとさ……。

苦笑を浮かべながら振り返り、俺は彼女に話しかける。

「とりあえず、その見える線を追おうと思っただけど……一緒に行く？」

俺はそう聞いた。

彼女は一瞬ばかんとした表情をしたが、すぐに立ち直ったように笑顔が浮かべる。

「多分…それは貴方にしか見えてないんでしょうね？なら、わたしもついていきます」

「そっか、なら…行こう？」

微笑を浮かべる彼女に手を差し出す。

彼女はその手を取り、立ち上がる。

そのまま俺たちは手を繋いだまま歩き出した。

俺が見える青い線を追って…。

少し後、俺はふっと思い出した

（そういえば…まだ自己紹介してないか？俺…）

と…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0995x/>

白銀～俺は此处に居る～

2011年10月31日17時05分発行